

# 地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,  
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

第141号 会報 1993年11月30日

## 目次

	目	次	頁
1.	第95回総会並びに講演会案内	1	12
2.	第94回総会並びに講演会報告	3	12
3.	会長挨拶	3	13
4.	第173回運営委員会報告	5	13
5.	新入会員紹介	6	14
6.	「長谷川記念杯」の「長谷川・永田賞」への改訂・設立する件に関するの趣意	6	14
7.	長谷川・永田賞内規	7	15
8.	公開フォーラム報告	7	15
9.	長谷川記念杯に寄せて	9	15
10.	Institute for Rock Magnetism を訪問して	10	16
11.	国際学術交流事業補助金受領者の報告	12	
12.	日本学術会議会員候補者及び会員推薦人の選挙について	13	
13.	会費の銀行預金口座からの自動引落制度の実施について	14	
14.	地球惑星科学関連学会1993年合同大会収支報告	14	
15.	Rock Magnetism and Paleogeophysicsについて	15	
16.	人事公募	15	
17.	SGEPSS Calender	16	

### 1. 第95回総会並びに講演会開催のお知らせ (第5回地球惑星科学関連合同大会)

第95回総会並びに講演会は第5回地球惑星科学関連合同大会として下記の通り開催されます。

○期間: 1994年3月20日(日)~23日(水)

○会場: 東北大学 川内北キャンパス

固有セッションについて

共通セッション・シンポジウムについては、同封の連絡会ニュースを御参照ください。

○SGEPSS固有セッション講演申込および予稿原稿送り先:

★地球内部および月・固体惑星関係

〒657 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学理学部地球惑星科学教室

兵頭政幸

★太陽・惑星間空間、地球・惑星電磁気圏および地球・惑星大気関係

〒442 豊川市穂ノ原3-13

名古屋大学太陽地球環境研究所

小島正宜

○講演申込は1月7日(金)締め切りです。締め切り日以降に到着した申込、電話やFAXによる申込や遅延依頼は、受け付けることができません。

○総会議題の申込は、1月31日(月)迄に会長宛書面をお願いします。

○講演申込用紙及び予稿原稿フォーマットは、会報に同封されています連絡会ニュースに記載の統一フォーマットをコピーしてお使い下さい。尚、申込用紙には、必ず以下の固有セッションの小区分記号を記入して下さい。

A地球内部: 1. 主磁場 2. 電気伝導度 3. 地殻活動電磁気学 4. 磁気異常 5. 岩石磁気・古地磁気 6. その他

B固体惑星: 1. 太陽系 2. 月・隕石 3. 比較惑星 4. その他

- C太陽・惑星間空間：1. 太陽・太陽大気 2. 太陽磁気圏構造 3. 惑星間空間擾乱 4. 宇宙線 5. 太陽風・磁気圏相互作用 6. その他
- D地球・惑星電磁圏：1. 磁気圏構造 2. 電離圏構造 3. 磁気圏電離圏結合 4. オーロラダイナミクス 5. 磁気圏プラズマ波動 6. ULF波動 7. 惑星電磁圏 8. その他
- E地球・惑星大気圏：1. 大気圏力学 2. 大気圏化学 3. 大気圏放射 4. 惑星大気 5. その他
- 申込用紙、予稿原稿ともにコピーを同封して下さい。コピーを同封していないものは受け付けません。
- (a)講演申込用紙の氏名、所属はプログラム編集・印刷の都合上、日本語表記が可能な場合は必ず日本語でお願い致します。  
(b)講演題目は、予稿と同じ言語でお願いします。  
(c)外国人の氏名はアルファベット表記でも差し支えありませんが、所属はできるだけ日本語で表示して下さい。  
(d)日本人著者名の場合は、漢字とアルファベットの両方の欄に記入されていること。  
(e)英語講演題目は、文頭、固有名詞、略号以外は小文字とすること。
- 予稿原稿は、合同大会用の規定の枠（A4）にあうようにできるだけワープロを使用して下さい。印刷後のスペースはA5縦相当／縮小率70%になりますので、原稿をこれまでより大きめにお書き下さい。
- 非会員のみによる講演申込は受け付けません。筆頭著者としての講演申込は原則として一人一件です。ただし発表分野が異なり、それぞれを口頭、ポスターに分けて行う場合に限り一人2件までの申込を受け付けます。
- 口頭発表の時間は12分（講演9分、質疑3分）を予定しています。いつもより短いのでご注意ください。
- 発表方法：  
(a)ポスター発表・口頭発表の区分はご希望にできるだけ従いますが、プログラム構成の都合上ご希望の区分以外での発表をお願いすることがありますので、ご協力下さるようお願い致します。  
(b)口頭発表を半分の時間6分で行い、詳しい発表をポスターで併せ行うことが可能です。この方

法を希望される方は、□口頭□ポスターの両方に印をお付け下さい。

- 緊急の話題のために、約5件のポスタースペースを確保するべく、合同大会連絡会に申し入れる予定です。発表者は3月15日までに関係のプログラム委員にお問い合わせ下さい。
- 講演・ポスター発表の際にビデオ(VHS)もしくはパソコンを使われる方は、その旨、プログラム申込用紙にご記入下さい。
- 公開フォーラム等の開催申込について：  
公開フォーラムの開催を計画される方は、合同大会連絡会ニュースの案内に従い、12月17日までに合同大会実行委員会事務局に申し込んで下さい。また、SGEPSSのプログラムにも掲載致しますので、合同大会に申し込まれると同時にSGEPSSプログラム委員（名古屋大学太陽地球環境研究所 小島正宜）にも、お知らせ下さい。予稿原稿フォーマットでフォーラムの内容の詳細をお送り下されば、SGEPSSの予稿集にも掲載致します。なお、公開フォーラムの性格については会報第140号をご覧ください。

合同大会の予稿原稿の  
フォーマットは秋の学会  
とも異なります。  
ご注意ください。

## 2. 第94回総会・講演会報告

第94回地球電磁気・地球惑星圏学会総会・講演会は1993年10月12日(火)より14日(木)の三日間、神戸大学文理農学部キャンパスで開催された。会期は天候にも恵まれ、高台にあるキャンパスからの眺めを楽しみながらの学会となった。特に、懇親会会場の滝川記念会館からの夜景は素晴らしいもので、参加者はディスカッションの合間に楽しんでいた。特別講演は神戸大学の伊東敬祐教授が「自然は何故リズムとカオスのほざまにるか」というテーマで行なわれ、近年の話題の分りやすい解説をうかがうことができた。今回の国際学术交流・海外研究者の招聘事業には李徳貴中央研究院地球科学研究所(台湾)研究員を迎えた。氏は台湾で数少ない古地磁気研究者で、発表内容はもとより、東アジアの古地磁気研究全般について、有益な議論を行なうことができた。また、今回は初めての試みとして、二つの公開フォーラムが持たれ、多数

の参加者による熱心な討論が行なわれた。

総会は、神戸大学・山口会員の開会の辞によって始まり、議長として指名を受けた小島運営委員によって議事の進行がはかられた。神戸大学の安川教授の大会委員長挨拶の後、大家会長から小口高会員に長谷川記念杯の授与、徳丸宗利会員にJGG賞の授与、挨拶が行なわれた。報告事項として、森岡運営委員より運営委員会報告、福西、本蔵両JGG編集委員より編集委員会報告があった。議事としては長谷川・永田賞改訂設立について趣旨説明・討論の後賛成多数で承認された。次期講演会(合同学会)については準備状況が大志万運営委員より報告された。次々期開催地に関しては名古屋大学STE研究所でお世話頂くよう寺沢運営委員より提案があり、快諾された。国分評議員から謝辞をいただき、小島運営委員の閉会の辞によって締めくくられた。

### 第94回総会式次第

- |               |             |                                  |         |
|---------------|-------------|----------------------------------|---------|
| 1. 開会の辞       | (山口会員)      | 9. 議事                            |         |
| 2. 総会議長指名     |             | 長谷川・永田賞改訂設立                      |         |
| 3. 大会委員長挨拶    | (安川大会委員長)   | 次期開催地                            |         |
| 4. 長谷川記念杯授与   | (大家会長)      | 次々期開催地                           |         |
| 5. JGG論文賞授与   | (大家会長)      | 10. 謝辞                           | (国分評議員) |
| 6. 会長挨拶       | (大家会長)      | 11. 閉会の辞                         |         |
| 7. 運営委員会報告    | (森岡運営委員)    |                                  |         |
| 8. JGG編集委員会報告 | (福西、本蔵編集委員) | (JGG編集委員会報告の記事は都合により次号に掲載いたします。) |         |

## 3. 会長挨拶(第94回総会)

会長 大家 寛

### 1. 序

秋の学会を神戸大学で開催していただき、大会委員長安川先生はじめ、乙藤、兵頭、両実行委員長また、同大学における会員の方々のご盡力で、諸学会行事がとどこおりなく進められており、後に改めて謝辞が評議員の方からありますが、私からも一言お礼申し上げます。また、今大会でも250を越す論文発表があり当学会も隆盛の一途をたどっていることを会員の皆様ともども同慶に存する次第です。

さて学会の機能は、会員の自治としてそれぞれの「独創性ある研究の推進ならびにその情報の交換」に主目的がありますが、これは即、次の三つの柱より成り立っていると思います。すなわち、

- i) 研究活動の環境作り
- ii) 研究の発表
- iii) 研究成果の評価

です。そこで、この件を特に今回のテーマとしてとりあげさせていただきます。

### 2. 研究活動の環境作り

研究活動の環境作りは、第一にそれぞれ属する機関の問題としてありますが、しかし基礎研究費、研究設備の充実、体制の確立などでは、同時に、学会が係わる部分も大きなものがあります。中でも科学研究費申請とその正しい評価が可能なチャンネルを確立することは学会として不可欠の問題です。当学会の係わる科研費細目は超高層と固体地球物理学ですが、超高層の領域では問題はいま次第に深刻になりつつあります。それは会員の間で比較的認識されずに進行してきたのですが、現在よりもっと申請件数を増さないと、細目「超高層」存立の骨格が危ぶまれるという事態があります。科研費は平均30%の取得率ですから多数申請するとまた、多数落選

するというきびしい現実もあります。しかし、学会としては科研費細目の柱を確立してゆかねばなりません。これは単に総合研究だけではなく、全ての科研費すなわち、一般研究、試験研究においてもわかりです。そこで運営委員会では、プロジェクトチームを作り来年度申請する科研費から、学会全体の視野で問題に対処してゆくことになりましたので、会員一同のご協力をお願い致します。

次に研究の方法論、また、Infrastructure の充実をめざした指針の一つとして、将来計画の検討を続けて参っていましたが、今度、日本学会会議では、地球電磁気学研究連絡委員会が中心となり作成した「地球電磁気学の発展的将来」が平成5年7月26日付けで正式に研連報告として認められました。特に、この計画を地球電磁気学研究連絡委員会の作業部会として作る時メンバーとして働く人々としては、私は「2000年を越えて将来に活躍する人を中心に」とコメントをしてきました。この研連報告を単に形式的なものとして2000年以降に有効に働く計画として実施して行ってほしいと思います。我々議論をした者は全て、一人一人自ら荷を背負って働くことが、問題解決に至る最も大切な時代に入ると思われます。

### 3. 研究成果の発表について

春、秋2回の大会ともに、250を越す学会発表は、いま、3日間で三パラレル・セッションをもって実施し、またポスター・セッションでは多くの論文が発表されています。当学会はポスターを重要視し、オーラルと並行させず、有効な発表形態となるよう努力してきたことは高く評価されることです。しかし、いま、これだけの論文発表数の隆盛を見ると、3日間の講演で会期を終えることは、発表をお座なりにあつかってしまう恐れが生じてきました。それで現在、運営委員会では、学会期間を再び4日に戻すことを検討しています。以前の4日会期と異なる点は以前の二パラレル・セッションではなく三パラレル・セッションとした上での4日間という点です。したがって増加する一日は、もっと工夫し、異なる Discipline の間で、もっと積極的な交流があるようなセッションを立てて行くことではないかと思っています。また惑星科学会とはこの秋の学会においても、すでに実現しつつありますが、会場を近づけ会期を継いで、できましたら最終日（または初日）の一日位はオーバーラップしてゆくことが望まれます。

今回運営委員会の努力で予稿集の体裁が一層確かなものに確定してきました。すなわち、A4版正常位置で見られるものになっています。そして

ABSTRACTS集として、同時に国際版ともなりました。英和完全対応のこのAbstract集は、さらに一工夫して、プラリオリティを主張できるAGUにおけるEOSのアブストラクトのレベルまで近づく必要があると思います。しかし何と言っても成果をJournalに投稿することは、常に繰返されているように、不可欠です。一般に、国際誌に広く投稿することを奨励するわけですが同時に、これからは、我国で生れ、我国で育つ学問、physicsが重要で、それこそが、高く評価されるようになってきて、真の独創性の評価をうるものとなると言っても過言ではありません。そうした内容の研究は当然、J.G.G.に投稿すれば、我国の研究リゾースをもって、国際貢献することとなります。

たとえば、我国の土壌に育ちつつある学問は、磁場成因としてのダイナモ、岩石電磁気学等伝統的な研究はもとより、最近では磁性バクテリア、あるいは鍾乳石の磁化、等印象深いものがあります。また我国のテレビカメラによって得られたオーロラ像等は、パルサータイミングオーロラ解明のような磁気圏の謎を千枚通しで切抜いてゆくような的を射る仕事となり、あるいは、EXOSシリーズの衛星観測の貢献、また、我国に根差した木星電波観測等もその例かと思っています。最近、銀河中心のデカメートルパルサーの論文をNASAをはじめ多くの電波科学者がこのJ.G.G.から求めています。学会で発表すること、雑誌に投稿する事とは常に同じ重要性をもって、時に雑誌で発表するまでは次の講演は行わないという位まで頑固といって良い信念をもって進めた時、着実に学問もJ.G.G.ともども育ってゆくと思う次第です。

ところでJ.G.G.誌に関し、日本での学問の発祥という問題を取り上げる時、しかし、これを一時代前の一種の国粹主義との誤解があつてはなりません。私事になりますが、すでに20年前、20世紀後半から21世紀入口にかけての5極文明論というものを書いたことがあります。五極とはアメリカ、ソ連、ヨーロッパ、中国そして日本です。日本のような小さな一國が、一極を背負わなければならないという主張です。それは一見奇異に見えますが、我国のもつ歴史的地理的特異性から我国が真の存在を意識するならばさけて通れないと思われれます。現に、ハレー彗星探査の時期頃から、五極文明問題は現実になり最近になって、あまり奇異なこととしてでなく理解されはじめたと思います。一極を背負うということは今までのように外から入る情報に基づいて、学問を追ってゆくだけではなく、自ら学問を起こしてゆくことが大切だと思います。J.G.G.誌を学

会の柱とする重要さはここにもあります。いま、AGUからは、他国との協力関係を強く働きかけてきていますが、まず各学会が自立した上ではじめて真の連合及び協力があるものと思います。

学会のもう一つの危機は、発表の機会としてのシンポジウムのインフレーションです。いま、国内での各機関、及び総合研究、特別事業等々でシンポジウムの開催はほぼ飽和しているわけですが、さらに、国際化の進行で、手軽に国際シンポジウム参加が可能になりつつあります。そこで反動として、研究の時間に大幅に食い込んでまいります。そうした状況で、学会はむしろ発表面では切り代にされつつある恐れがあります。しかし時に、各機関やプロジェクトがその存在の位置づけとしても開かれねばならない集会としてのシンポジウムと、そうした制約のない学問の原点となる学会とは、おのずとその意義も変わってきます。学会運営委員会では、各共同利用研究機関の対応する委員会とリエゾンをとって、研究者にもっと研究の時間を生むような方策を求めて行くとともに学会重視への理解をもとめることを考えつつあります。たとえば学会のシンポジウムとある科学研究費のシンポジウムをオーバラップさせてゆく等もその知恵の一つで、そのため自由度を増す意味でも学会4日制の検討が必要になっております。

#### 4. 研究成果の評価

最後のテーマは、研究成果の評価ですが、評価のうち批判するという面でしたら各セッションの質疑応答で忌憚なく意見交換が進められ、一層良い学問へと進んでいると思います。ここでは、むしろ、シニアの科学者が若い科学者の仕事を良く聞く面を、そして若き学究を encourage するという面について強調したく思います。その意味で国内学会のセッションをシニアの科学者は軽視することなく、また自らの発表への思いに片寄らず、時間を出来るだけ作り、若き学究の歩みを詳しく見つめていただく必要があると思います。

こうした方向での学会の任務の一つに、当学会及び他機関での賞への推薦があります。この点、評議委員会では積極的に推薦の件にだざさわっています。ところで、当学会では20名にわたる高名な先輩達が受賞してきました長谷川記念杯を新しい賞に改定する件がこの総会に提案されます。後に詳しく説明されますが、長谷川・永田賞と改訂されることは、この賞を当学会の最高栄誉であるばかりでなく国際レベルでも一般の賞であることをめざしています。それにともないその他の学会賞もその在り方等の見直しを含め運営委員会、評議委員会で検討しています。

以上学会のさらなる発展を祈りつつ、まず、会長挨拶にかえさせていただきます。

#### 4. 第173回運営委員会報告

平成5年10月11日第173回運営委員会が、神戸大学理学部において開催された。主として審議された議事は以下のとおりである。

##### 1. 諸報告

前回議事録承認の後、各担当委員から前回以降の報告が行われた。

##### 2. 第94回総会講演会準備打ち合せ

大会実行委員会委員から準備経過の報告があった。次いで総会式次第とその役割分担を決定した。

##### 3. 新入会員承認

申請のあった5件の入会申込について審査し承認された（新入会員紹介の項参照）。

##### 4. 長谷川・永田賞設立にともなう長谷川記念杯内規の改正案の検討

総会に提案される長谷川・永田賞の改訂設立案の趣意と内規改正案が検討され原案が作成された（長谷川・永田賞の項参照）。

##### 5. 国際学術交流審査

申請のあった招へい及び派遣について審査が行われ、平成5年度後期海外研究者招へいとして、李徳貴博士（台湾 中央研究院地球科学研究所）及び、海外国際集會派遣として石井守会員を決定した。

##### 6. '94合同大会実行委員会報告

1994年3月20～23日東北大学川内北キャンパスで開催される'94合同学会の実行委員会の報告が行われた。当学会では3つのシンポジウムと7つの共通セッションに参加することが確認された（同封の合同大会連絡会ニュース参照）。

##### 7. 第16期日本学術会議会員候補者及び推薦人選挙について

この件について学会内規第7条にもとづき会員候補者および会員推薦人の候補者を選び、11月末に送付される会報で選挙公示し正会員による選挙を行うことが確認された。

##### 8. AGU Convocation of Presidents について

1994年5月、AGUの75周年を記念して、諸外国関連学会の会長による集会を持つという案内がAGU同事業実行委員会から届いた。当学会としては参加する方向をとることを確認した。

9. 学会事務センター会員業務費値上げについて  
学会事務センターから提出されていた会員業務費値上げ（6%）は、認めざるを得ないことが確認された。関連して、会計担当委員より、会費値上げについては、現時点では値上げを見送り、近い将来においてJGG誌購読料化の問題と関連して検討すること、またその間の対策として滞納者の一掃、海外会員会費の見直し等を行う案が提案された承された。
10. 会費の銀行自動引き落としについて  
学会事務センターから、学会会費の銀行自動引き落としが可能になった旨の報告があり、当学会は希望者について利用を実施することとした。
11. JGG将来計画について  
前回の運営委員会の議論を踏まえ会長からJ

GG編集委員長へ回答される文書が紹介された。この問題の議論は、別に運営委員会を開催し継続審議することとした。

12. 科学研究費「惑星科学」恒常化検討について  
惑星科学学会から呼びかけのあった科研費時限細目「惑星科学」を恒常化のための相談会の紹介があり、細目「超高層」を確立する件と矛盾しない方策を検討しつつ支援していく方向で議論が行われた。
13. 学会賞について  
長谷川記念杯を改訂し長谷川・永田賞を設立することと関連して、田中館賞以前での若い研究者の励みとなる賞の設定が議論された。この件については更に検討を続けて行くこととなった。
14. 学会開催期間について  
学会開催期間が現状の3日間では十分な発表討論ができなくなっているという実情から、学会会期延長の検討が行われた。学会（Society）の意義を100%発揮できるように大会の方策を、明年秋の大会の実施をにらんで早期に検討することとした。

## 5. 新入会員紹介

前回の運営委員会（第172回）以降入会申込をされ承認された方々は以下の通りです。

### 正会員

鷹見 雅和 石川島播磨重工業（株）  
宇宙開発事業部  
白井義比古 富山県立大学工学部

### 正会員（学生）

村尾 一 東北大学大学院理学研究科  
関 雅幸 神戸大学大学院自然科学研究科

### 賛助会員

富士通株式会社（宇宙システム部）

以上の新入会員の加入により、10月13日現在、正会員646名（内学生会員75名）、海外会員54名、名誉会員4名、賛助会員17社となります。

## 6. 「長谷川記念杯」の「長谷川・永田賞」への改訂・設立する件に関するの趣意

（第94回総会会長説明）

昭和41年2月、当学会賞の一つとして長谷川記念杯が設立された。これはその内規にもあるように、地球電磁気学及び地球惑星圏科学の発展に顕著な功労のあった会員に贈りその業績を表彰することを趣意としている。この賞に長谷川杯と冠せられたのは、地球電磁気学会の創始者の一人、長谷川万吉先生の功績を讃えその榮譽にあづかることにあった。

当学会では運営委員会、評議員会を通じて学会賞のあり方を検討してきたが、従来の長谷川記念杯が趣旨としていた学会活動等の功労の評価とそれに対する感謝に加え、さらに学間における国際的なレベルでの高い貢献をも含む賞として位置づける、「長谷川・永田賞」として総会に提案することとなった。

ここに長谷川・永田賞とするのは、当学会初代委

員長であった長谷川万吉先生の榮譽にあづかることはもとより、さらに永田武先生の功績とその努力の榮にあづかることをあわせて含むことになる。

東京大学名誉教授並びに元国立極地研究所所長、永田武先生（1913-1991）は長谷川万吉先生に協力し日本地球電磁気学会の創立に貢献された一人であり、国際協同研究IGYにおいてわが国のリーダーシップをとることを契機として、地球電磁気学及び超高層物理学の発展の基礎となる講座研究施設の部門増にかかわる努力をはじめ、南極観測事業の草分けとして直接に国立極地研究所の設立、また宇宙科学研究所の設立における中心的役割等にかかわっている。また、国際学会にも大きく貢献されIAGAの会長をはじめSCARの重要メンバーであったとともにSCOSTEPにおいても重要メンバーとし

て名誉会員になっている。

学問研究において、まず岩石磁気学への貢献は大きく、その分野の指導者として活躍してこられたことはもとより、超高層物理学においてもオーロラ研究に取り組み、オーロラ電流系に関する研究をはじめ、東京大学における研究室、国立極地研究所を通じての薫陶はこの研究分野でも幾多の有能な学究を生んでいる。

永田武先生の業績をここで充分言い尽くすことは不可能にしても、先生の晩年、再び太陽系研究において隕石磁気学にかけたその研究への集中と情熱はなみなみならぬものがあつた。ここで長谷川記念杯を改定し学問への貢献をあわせ表彰すべく設立する賞に永田武先生の業績はその名に加わるにふさわしいものである

## 7. 長谷川・永田賞内規（第94回総会議決）

平成5年10月13日制定

第1条 地球電磁気・地球惑星圏学会、長谷川・永田賞は、地球電磁気学、超高層物理学、及び地球惑星圏科学において、学問の成長を先導する顕著な業績をあげるとともに、学界の発展にかかわる事業に功勞のあつた会員に授け、それらの業績を表彰する。

第2条 受賞者は次の各項の手続きを経て決定する。

- (1) 受賞候補者は学会員から選ばれる長谷川・永田賞受賞候補者選考委員会によって選考される。
- (2) 受賞候補者選考委員会委員は運営委員会によって選出される。
- (3) 受賞者の決定は評議員会の議決による。

第3条 長谷川・永田賞は賞状及び記念品\*とし、総会においてこれを授与する。

付則 授賞番号は長谷川記念杯番号を継続する。

\* 記念品は、金メダルにするか金杯にするか総会の審議の結果、運営委員会の検討事項として残されることになった。

## 8. 公開フォーラム報告

A. スヴァールバルISレーダの利用と研究の可能性について（平成5年10月13日（水）12:45～13:45）

松浦延夫・藤井良一（名古屋大学太陽地球環境研究所）

本学会初の公開フォーラムの機会を与えられたことを感謝しております。

名古屋大学太陽地球環境研究所はEISCAT（ヨーロッパISレーダ）科学協会との共同により、北極圏のスヴァールバル諸島スピッツベルゲン島にISレーダ（非干渉性散乱レーダ）を建設して、北極圏から見た太陽地球環境の国内ならびに国際共同研究を行なう計画を数年来検討してきました。1993年、EISCAT科学協会が一足先にレーダ建設に着手したことにより、この計画は新し

い局面に入ってきました。一方、太陽地球環境研究所は、共同利用活動の一環として、また将来のスヴァールバルISレーダの共同利用に備えて、現在スカンディナヴィア北部で運用中のEISCATレーダに関わるデータ利用による共同研究や共同実験の計画を推進する窓口役を果たしつつあります。このような状況を踏まえ、スヴァールバルISレーダ並びにEISCATレーダの利用と研究について、多くの学会員の方々に計画の現状をご理解頂き、計画に関心を持っていただくとともに、種々御

意見を拝聴するため、本公開フォーラムを企画しました。

公開フォーラムは昼休みの時間の開催でありましたが、約50名の方々のご出席を得て、熱心な討議が行なわれました。公開フォーラムに先だつて、説明用の簡単な資料を配布させて頂きました。公開フォーラムは、(1)から(6)の各テーマ毎に説明講演とそれに続く討論という形式で進められました。(1)概要では、EISCAT側がパラボラアンテナ(直径32m)1機を備えたスヴァールバルISレーダの建設を、日本側がパラボラアンテナ(直径32m)1機を増設するという日欧協力分担に関する合意、EISCAT側が、1993年から3年計画のレーダ建設に着手したこと及び日本側の対応状況、日欧協力の組織・体制、1994年開催を計画中的日本-EISCATシンポジウム等について松浦(名大STE研)が説明を行ない、続いて藤井(名大STE研)が(2)EISCATレーダの二つの観測運用形態であるCP(各国共通の観測プログラム)及びSP(各国独自の特別プログラ

ム)の内容説明、(3)EISCATデータの国内利用を円滑に行なえるようSTE研が準備を進めているデータ・アーカイブの現状説明、(4)日本で計画中的EISCATレーダとの共同実験についての説明を行ない、これら各テーマ毎に参加者からの質疑、討論、提案がありました。さらに、(5)上記レーダに関わる将来の観測計画についての討論では、ロケット観測、オーロラ観測、ライダー観測、衛星観測等との共同実験が討議され、最後に(6)上記レーダに関する情報提供の手段として、太陽地球環境研究所によるニュースの発行が検討されました。

本公開フォーラムを通しての感想は新しい研究テーマや計画等について学会員の方々に関心を持って頂き、参加を呼びかけるのに、公開フォーラムは極めて効果的であるということです。ただ、テーマの規模、内容にもよりますが、詳細な研究計画等について討議するには、時間の制約が厳しいかと感じております。公開フォーラムの企画が有効に活用されることを期待しています。

#### B. シューメーカー・レビュー彗星と木星衝突とその観測計画(平成5年10月14日(木)12:15~13:15) 大家寛・森岡昭(東北大学理学部)

1994年7月20日前後にシューメーカー・レビュー彗星の木星大気圏突入及び本体へ衝突が予想されている。この1000万年に一度といわれる大衝突現象に対してInternational Jovian Watchをはじめ、諸外国では観測の検討が進められるが、我が国においても、本学会が係わる主として電波によるプラズマ現象について検討し、特にそれらの現象の観測体制をどう組み立てるかを相談する趣旨で、標記公開フォーラムが、神戸学会の折開催された。

まずこれまでのシューメーカー・レビュー彗星についての情報が報告され、木星電離圏・磁気圏にどのような擾乱が発生するか、その情報整理と検討が行なわれた。その概要は以下のとおりである。

- i) 衝突日時 1994年7月18日-7月24日
- ii) 衝突時速度 ~60km/s
- iii) 質量 ~ $3 \times 10^{19}$ kg(最大核)
- iv) 衝突位置 木星夜側中緯度(-34°)
- v) 衝突エネルギー ~ $10^{29}$ エルグ

次いでこの大衝突で、木星の磁気圏・プラズマ圏で生じる現象について議論された。大家会員からは、木星磁気圏から大気圏への彗星の衝突軌道において3つのphaseのプラズマ現象のpredictionが示された。すなわち(1)100RJ位から始まる高々度での

相互作用の開始(2)内部磁気圏において磁力線を通じて発生するプラズマ波動及び(3)大気圏において生じる衝撃波のグローバル伝播によってもたらされるプラズマ擾乱である。続いて寺沢、森岡、小島の各会員より諸報告があった。それらの内容を要約すると木星の磁気圏から電離圏にわたる広い領域で生じるプラズマ現象に対応して、広い周波数レンジの観測が必要であることが示された。それらは、木星のキロメートル放射域に対しては、あけぼの衛星及びGEOTAIL衛星による波動観測、ヘクトメートル放射に対しては国立極地研究所のHFアレイアンテナ、デカメートル波帯に対しては東北大学、通総研稚内、兵庫医大がそれぞれ観測をすでに計画あるいは検討中であることが報告された。更に、デシメートル波帯については、名古屋大学STE研のIPSO観測装置及び通総研平磯の広帯域太陽電波観測装置(HIRAS)の援用の検討が開始している。さらにこのデシメートル波帯については、宇宙科学研究所白田、通総研鹿島の大規模電波望遠鏡のfacilityが有力であり、今後のはたらきかけが必要であることが話し合われた。

これから各観測チーム毎に密接に連絡をとりつつ進めてゆくことが話し合われた。



長年大学で暮らして、入れ替わり立ち代わりはいつて来る若い学生諸君とつきあっていると、自分も、いつまでも歳をとった気がしない。しかし、自分が学生だった頃のことを考えれば、停年近い大先生は近づきたい存在であったし、失礼な言いぐさながら、やはり歳を感じたものである。しかもなお、自分がいま周辺に同じような印象を与えているとはどうしても思えないのは、願望と言うよりはむしろ習性であろうし、あるいは、本来、精神年齢の発達が学生あたりで止まってしまった若い人が大学を好むのかも知れない。

考えてみれば、南極観測の始めから最近の北極地域の多点観測まで、よくもまあ好きなことをやって来たものだ和我ながら感心する。もちろん予算が十分にあったことは一度もないし、学生に手伝ってもらい、自分でも半田づけして観測装置を組立て、あちこちに頭を下げて寄付をもらって歩くことの繰り返しであったが、それを苦にしたこともなかった。時には、「巨額の予算を使ういわゆる巨大科学は、10年位経ったら次の10年は論文の投稿料だけにしたらどうだろう？その間その予算を他の分野に振り向けたら日本の科学は全体として世界のトップに立つことができるだろうに！」などとヤッカミながらではあったが。

オーロラの研究にはじめて高感度のテレビカメラを持ち込んだのはアラスカのデーヴィスのグループで、ついで当時、カナダのカルガリーにいたスコフィールドたちであった。われわれはこれらのグループにすこし遅れて、第12次の南極観測に、当時、東芝の研究所で開発されたばかりのSEM管を使ったテレビカメラを借りて持ち込んだが、これが昭和基地でのオーロラダイナミックスの研究の事始めとなった。高い時間・空間分解能をもつ高感度テレビカメラの導入によって、オーロラ電子の入射モードの分類が可能になり、夕方のオーロラと明け方のオーロラの決定的な違いが明らかになった。しかし、このことは、オーロラ電子の入射機構が明らかになったことを意味するものではなく、ようやくオーロラ粒子の物理を考える上での基本的な制約条件を与えたに過ぎない。

北極域での磁場とオーロラの多点観測は、オーロラの二次元観測の延長上にある。オーロラの物理は必然的に磁気圏の物理につながり、磁気圏の物理は必然的に磁場モデルにつながる。磁場モデルと磁気圏現象とは磁気圏物理の逐次近似の二つの基本要素で、磁気圏現象と電離層レベルの二次元現象、例えばオーロラなどとの物理的つながりから磁場モデルを検証できるし、磁場モデルが正しくなればじめて電離層レベルの現象と磁気圏現象との比較から磁気圏の物理に到達できる。両者が進展してはじめて真実に近づくことが可能になるのであって、それ以外の方法はない。人工衛星による磁気圏のプラズマ要素の観測が重要であることはもちろんだが、それだけでは問題は決して解決しない。ただでさえ層の薄い太陽地球系科学の研究者人口の大半が雪崩をうって人工衛星観測に参加してしまうのは決して望ましい形とは思えない。

停年をむかえて雑用から解放された今、学生にもどった気分で心から研究を楽しむことができそうな気がする。科学とは本来楽しみのためにするもので、いわゆる仕事ではない。外国にいくとよく、「日本の研究者は今でも土曜日に働いているのか？」と言う質問を受ける。私の答えは決っている。「いや、われわれは、土曜といわず普段の日でも働いている訳ではない。ただ研究というホビーを楽しんでいるだけだ。」自分自身のものを含めて、いままでとり貯めた資料だけでもホビーの種にはこと欠かない。世界中で、いかに貴重な資料がいかに



大家会長より長谷川記念杯を受けられる小口会員

たくさん埋もれてしまっていることか。

予算を獲得するために、目新しい、アピールしやすいプロジェクトを次から次へと計画し、続けて行くのは、事業であって科学とは言えない。科学とは本来楽しむために行われるべきで、予算獲得の手段になってしまったら本末転倒もいところである。しかし、科学が技術の進歩に依存している以上、好むと好まざるとに係わらず、研究は自己増殖的に大型化し、研究者がプロジェクトの歯車の一つ

に組み込まれて行くのは必然の勢いであろう。これからの若い研究者が、その中でどのように自分自身の楽しみや遊びを見つけて行くことになるのか、いささか気にかかる。長谷川記念杯が長谷川・永田賞に変わっても、杯に遊び心を継続して欲しいと思うのはこのような理由からでもある。

長谷川記念杯を頂いたご挨拶としては、失礼なことばかりを書き連ねたようだが、これも精神年齢の幼さのゆえにご容赦頂けるなら幸いである。

## 10. Institute for Rock Magnetism を訪問して

福間浩司 (京大理)

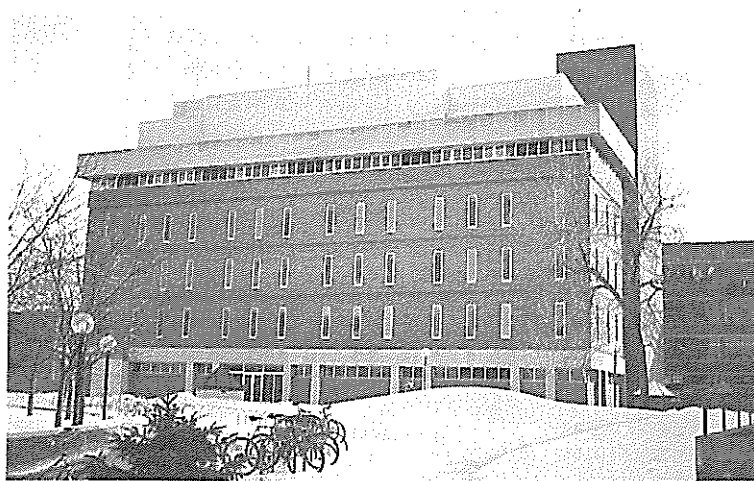
93年2月にアメリカのミネソタ大学の Institute for Rock Magnetism (IRM) に Visiting Fellow として訪れる機会をもった。IRMは90年の秋に、NSFなどからの出資を受けて設立された共同利用の施設である。アメリカだけでなく、カナダやヨーロッパからも Visiting Fellow を受け入れており、日本からは地質調査所の木川氏をはじめ私で3人目である。設立から2年半が経過し、ほぼ当初の計画通りの装置が整えられた時期に訪問することができた。

アメリカで古地磁気・岩石磁気の共同利用施設を設立するという構想は、86年のAGUの Geomagnetism and Paleomagnetism セクションのワークショップに遡る。ここでセクションの将来計画が検討された折に、古地磁気・岩石磁気学の研究者に最

新鋭の装置を使って研究できる共同利用の施設を作る必要性が提言された。その背景には、最近古地磁気学がより高度な岩石磁気学的手法を必要とするようになったこと(例えば、再磁化の検討)、岩石磁気学は単に古地磁気学の基礎を与えるだけでなく様々な問題に応用されるようになったこと(例えば、古気候の復元)がある。その一方、かつてのように自作できる装置だけでなく、一つの研究室で揃えるにはあまりに高価な装置も不可欠になりつつあることも大きな理由である。

提言を承けて、早くも90年の秋にはミネソタ大学の S. K. Banerjee 教授の研究室を発展させる形で IRM が設立された。設立の目的に従って、無料で装置を使用することができる Visiting Fellow を半年に

1度募集している。滞在期間は3週間が限度である。応募に際しては簡単な研究計画書を提出する。この研究計画書はスタッフ以外の古地磁気・岩石磁気学の研究者から構成される Review and Advisory Committee によって審査され、許可されるという形を取っている。いままでIRMを訪れた Visiting Fellow の中には、すでに優れた業績を挙げた研究者だけでなく、私のようなポスドクや大学院生も多く、さらに古地磁気・岩石磁気学の分野以外の研究者も含まれている。募集がAGUの



ミネソタ大学の Shepherd Laboratory、Institute for Rock Magnetism (IRM) はこの建物の2階にある。

EOS や GSA Today などパブリックな媒体を通して行われていること、装置の使用について Lab. Manager である C. Hunt 氏によって懇切な説明が行われることなどを考え併せれば、Visiting Fellow として研究するには特別なコネクションを必要とせず、まさにオープンな共同利用が現実に行われていると言える。

IRMには、次の装置をもつ5つの実験室がある。

- (1) 磁性鉱物の合成等  
磁性鉱物の合成のための炉、熱残留磁化獲得のための炉、振動型磁力計
- (2) 磁区構造の観察  
Atomic/Magnetic Force Microscopy System (AFM/MFM), Magneto-Optic Kerr Effect System (MOKE)
- (3) 残留磁化・帯磁率の測定  
超伝導磁力計、スピナー磁力計、交流消磁装置、熱消磁装置、帯磁率計、帯磁率異方性測定装置
- (4) 磁気的性質の測定  
Alternating Gradient Force Magnetometer (MicroMag), Superconducting Susceptometer (MPMS)
- (5) メスバウアースペクトルの測定。  
Mossbauer Spectrometer

この中で注目すべきは、(2)と(4)の実験室にある装置である。いずれも最近IRMに導入されたものである。磁区構造の研究は残留磁化のメカニズムを考える上で決定的に重要であるが、近年理論的な面では数値計算の導入により大きく進歩した。

(2)の実験室の装置は従来はBitter patternのように磁壁を観察するのではなく、各々の磁区のミクロな磁化を直接とらえることで磁区構造を観察する装置である。近い将来、数値計算の結果と直接比較できる重要なデータを続々と生産するに違いない。一方、Visiting Fellowに最もよく使われているのは、(4)の実験室の2つの装置である。私も主としてこれらの装置を使って、古気候との関連を調べる目的で、中国の黄土の磁気的性質を測定した。いずれも最近開発された高価な装置であり、これらを備えている古地磁気学のラボは現時点では少ないだろう。しかし、非常に汎用性があり、将来古地磁気学や応用的な岩石磁気学でも不可欠になると確信している。その特徴を挙げると、MicroMagは、従来の振動型磁力計では測定できなかった堆積物の磁気と

ステリシスを容易かつ非常にスピーディに(すなわち一定時間で大量の試料について)測定できること。また、MPMSでは、低温(〜4 K)かつ強磁場(〜5 T)のもとで測定ができ、低温での磁気的な変態を利用した磁性鉱物の同定や、超常磁性鉱物の定量的な見積もりなど従来困難であった測定が容易に行えるようになった。

IRMについて印象に残ったのは、やはり広さとテクニシヤンの存在である。5つのそれぞれの実験室が私たちのラボとほぼ同じ程度の広さを持っている。その上、同じフロアにスタッフや大学院生のオフィスが用意されている。滞在している間は、特にIRMにスペースの余裕があるとは感じなかったが、京都に帰ってくるとラボの狭さに息苦しさを感じてしまった。(1週間もすれば慣れてしまったのだが。) S. K. Banerjee 教授が93年3月に私たちのラボを訪問された際に、"An incredibly large number of paleo- and rock-magnetic instruments were packed in a single room."と評されたのも無理はない。また、テクニシヤンのJ. Marvin氏はIRMに欠かせない存在である。AFM/MFMはまだ開発中の段階であったが、Marvin氏なしでは実際のところ仕事が進まないという感じだった。彼は、50才を越えていると思われるがソフトウェアについてのトラブルシューティングも引き受ける。学生も他のスタッフも彼を非常に頼りにしていた。

日本の古地磁気学・岩石磁気学の研究者や大学院生の方々にも是非一度IRMにVisiting Fellowとして行かれることをお勧めする。Visiting Fellowは最大3週間、最新鋭の装置を使って測定に集中することができる。そのうえ、実際に測定することで彼らの持つノウハウを学ぶこともできる。S. K. Banerjee教授の話では、IRMはアメリカ以外の国からのVisiting Fellowを歓迎しているようだ。IRMからのNSF等の出資先への報告書にも日本やヨーロッパからのVisiting Fellowの存在が強調されていた。しかし、個人的にはこれから先も本当に歓迎されるのだろうかという疑問に思ってしまう。93年の夏は、Visiting Fellowの数が大幅に増えスケジュールの調整が難しかったらしい。日本からは全く資金面での負担はしないのだから、やはり“ただ乗り”とみなされても仕方がない。日本にもIRMのような、十分な装置をもち、オープンで、有能なテクニシヤンがいる古地磁気学・岩石磁気学のための共同利用施設ができないものだろうか。

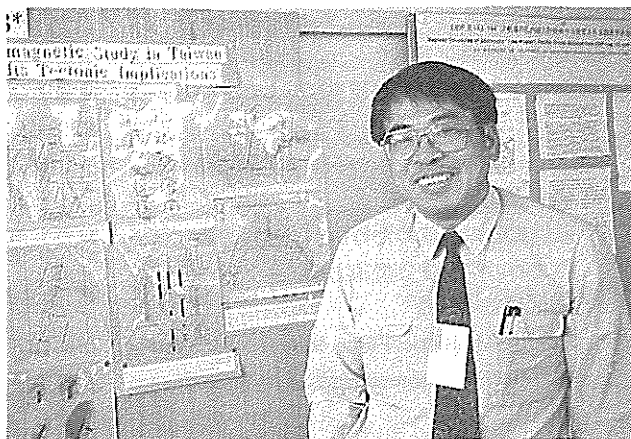
President and all the members of SGEPPS:

It was my honor to have this opportunity to be invited by your society to attend your 94th annual meeting held at Kobe last week. For me, it was a really unforgettable exciting experience. Although it was a short stay, I have learned a lot from this meeting and I have also earned a lot of friendship from most of you.

I found most of the abstracts collected in the proceeding were written by Japanese but with a brief English introduction, also many abstracts associated with a figure showing their major results. In my opinion, it is a very good way to present the papers, because both of them are very helpful especially for the foreign attendants.

For this meeting, there were three conference rooms used at the same time. This showed that your society had very active academic activities. However, the rooms were organized at three different buildings. It seemed to be too far away for those who are interested in the papers presented at different rooms but had a very closed time schedule. In this situation, they should miss some of them.

Discussion at the poster section was really good. I have had many valuable suggestions and comments for my presentation from it. It should be very helpful for my future research work. But in my opinion, the room seemed to be somehow a little small, even it already separated to two places. When people found it was always too crowded, he might abandon to enter and lost the communication to the others. In addition, if each poster could have 3 to 5 minutes presented in oral section, I think it might help for solving this difficulty because people could choose what they desire to see and discuss with the authors instead of spending the time on looking around.



李德貴博士 (ポスターセッション会場にて)

This time I have also found a lot of students attend this meeting. Some of them presented the papers too. The attendance of students is very important for all the academic societies. Your society has proved a lot of such activity. It is really a very good phenomenon. However, students seemed to be too quiet in discussion and the students spent too much time on reading his own note for his presentation. These might be somehow a little defect.

As a foreigner could be invited by your society, I feel very honor. But to give my comments so straightforward, I feel very uncomfortable. However, these are also what I expect to our geological and geophysical societies to improve in the future. I apologize for saying so much here.

Thank you again for giving me such an unforgettable opportunity.

Sincerely yours,

Teh-Quei Lee

Research Fellow

Institute of Earth Sciences

Academia Sinica

P.O.Box 1-55, Nankang, Taipei, ROC

## 12. 日本学術会議会員候補者及び会員推薦人の選挙について

第16期日本学術会議会員の選挙に際して、本学会は、地球物理学研究連絡委員会（第4部所属）の指定する学術研究団体として登録されています。本学会は会員候補者1名及び会員推薦人1名と予備者1名を指名することができます。会員推薦人は各登録団体から選出されるもので、会員候補者の中から日本学術会議会員（地球物理学からは2名）を決めるという重要な役目を持ちます。また予備者は推薦人が事故などで欠けたことにより推薦の決定ができなくなる場合、新しく推薦人に充てられます。

第76回総会で承認された方式（本学会内規第7条一名簿巻末の学会規約参照）にしたがって、第16期日本学術会議会員候補者及び会員推薦人とその予備者を指名するために選挙を行いません。すでに運営委員会と評議員会の議により、下記の本学会正会員の方々を被選挙者として決めています。今回は、「会員候補者」と「推薦人」の項にわたり被選挙者が同一人となりましたが、必ずこの中から選び、下記要項にしたがい投票してください。推薦人選挙における第2位の得票者を予備者といたします。

投票要領 同封の投票用紙に日本学術会議会員候補者及び会員推薦人各1名を

会員候補者は 黄色の投票用紙に

会員推薦人は 青色の投票用紙に

記入し、同封の小封筒にいれ、返信用封筒（切手貼付をお忘れなく）を用いて、郵便による投票を行なってください。

郵送先 〒113東京都文京区本駒込5-16-9  
学会センタービル  
（財）日本学会事務センター内  
地球電磁気・地球惑星圏学会 宛  
投票〆切 1994年1月14日（金）受取分まで。

### 記

被選挙者（候補者）氏名（五十音順）

第16期学術会議会員候補者被選挙者

大家 寛、西田篤弘、行武 毅

第16期学術会議会員推薦人被選挙者

大家 寛、西田篤弘、行武 毅

### 1 3. 会費の銀行預金口座からの自動引落制度の実施について

学会の財政状態が必ずしも順調でないことは、すでにいろいろな機会にお知らせしてまいりました。とくに最近にいたりまして日本学会事務センターの「会員業務受託経費」の約6%の値上げや、来年度に予想される郵便料金の値上げ、さらに経済全体の不況によるさまざまな影響などネガティブな要因のみが目立ちます。しかし、運営委員会といたしましては、早急な会費値上げはまだ考えておりません。その代り、可能な限りの経常経費の節減や会費収入の安定策などを目下追及いたしております。

その一環といたしまして、会費の自動引落やクレジットカードの使用を検討してまいりましたが、当学会の経理事務を委託しております事務センターで、銀行預金口座からの会費自動引落制度導入の準備が整い、来年度から実施可能となりました。つきましては、11月20日以降に事務センターの方から必要な書類等が会員宛に

送られます。この機会に自動引落を希望されたい方は、手続きをお取りいただくようお願いいたします。いうまでもなく、自動引落を利用されるかどうかはあくまでも各自のご判断ですが、学会全体としては会費収入の安定化、また会員からみれば会費納入手続きの簡素化という利点がありますので、できるだけご協力いただけるようお願いいたします。今回お申し込みいただきますと、平成6年4月25日に平成6年度分の会費が指定の銀行口座より自動引落されます。もし未納分の会費がある場合には同時に引き落とされます。また、自動引落制度への初回登録料(250円)と、毎年の引落手数料(200円)は、恐れ入りますが各自でご負担いただけるようお願いいたします。

より詳しいことは、事務センターより送られます資料をご参照ください。学会財政の強化のために会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

(運営委員会会計担当)

### 1 4. 地球惑星科学関連学会1993年合同大会収支報告(最終版)

3月19日(金)～22日(月)の期間に東京都立大学で開催された、地球惑星科学関連学会1993年合同大会の大会運営に関して、大会実行委員会内の経理小委員会よりの最終収支報告が、地球惑星科学関連学会連絡会を通してありました。

費目	収入	支出	収支
運営費+印刷費	7,476	6,734	742
懇親会	1,625	1,503	122
プログラム送料	1,077	1,077	0
合計	10,178	9,314	864

単位：千円

以上収支は、86万円の黒字。

この黒字の主な理由は、

- 一、会場費(都立大)が無料であった。
- 一、時間表示用に使用したパソコン11台が無料で借りられた(NECより)
- 一、予稿集を200冊増製本し、大会終了後も170冊販売することができた。
- 一、印刷・製本の費用がかなり良心的であった。との事です。

黒字分は、地球惑星科学関連学会連絡会の運営資金として使用されることになりました。当学会の地球惑星科学関連学会1993年合同大会への支出は、各学会員に対して実行委員会から直接送付された講演プログラムの送料分(114,000円)のみでした。

地球惑星科学関連学会1993年合同大会実行委員会の多大な努力に対して、感謝したいと思います。

(運営委員会合同大会担当)

## 15. Rock Magnetism and Paleogeophysicsについて

岩石磁気・古地磁気グループの annual report である Rock Magnetism and Paleogeophysics は、1973年(1巻)から昨年(19巻)まで毎年500部発行されてきました。半数近くが海外に配布され、日本の岩石磁気・古地磁気グループの活動を宣伝する意味でもそれなりの役割を果たしてきたと考えられます。その一方で、継続をめぐるグループ内に意見の相違も見られました。今秋の学会の前に、今後の方針について約50名の方々にアンケートをお送りいたしましたところ、25名の方から解答が寄せられました。

その結果は、「廃刊」が12%、「現状のまま継続」が24%、「模様替えして継続」が56%、「不明」が8%でした。さらに、数人の方から今後の編

集を引き受けてもよいという申し出がありました。資金提供についても、かなりの方々から可能である旨の解答もありました。少なくともアンケートにお答えいただいた方々は、なんらかの形で継続を望まれていると判断されます。

現編集者といたしましては、今後の方針の取りまとめは、新たに編集の労をお取りいただく可能性のある方々をお願いしたいと考えました。今回のアンケート結果などの資料を、目下神戸大学の乙藤会員に中心となってお考えいただいております。もし継続となれば新たな編集委員から改めてご案内があると思われまますので、グループの皆様のご協力をどうかよろしくお願いいたします。

(鳥居雅之・浜野洋三)

## 16. 人事公募

### ●神戸大学理学部地球惑星科学科教官公募

神戸大学地球惑星科学科では下記により、助手を公募いたします。つきましては、関係各位にご周知いただき、適任者の応募につきご配慮下さいますようお願い致します。

#### 記

1 募集人員 助手1名

2 教育研究分野

惑星科学大講座、太陽系物理学教育研究分野  
(向井正教授)

3 分野および内容

この分野では、太陽系の起源と進化、始原天体(彗星、小惑星、惑星間塵等)に係わる理論的研究と共に、天体観測や惑星探査計画にも取り組んでいる。これに関連した教育・研究に従事するが、広く惑星科学分野に意欲があれば、これまでの研究経験は問わない。

4 着任時期

決定後なるべく早い時期を希望する。

6 提出書類

(1) 履歴書、(2) 業績リスト (3) これまでの研究経過(1000字以内)および今後の教育・研究計画(2000字以内) (4) 応募者について意見を伺える方2名の氏名と連絡先(外国人の研究者でも可) (5) 主要論文の刷りまたはコピー(5編以内)

7 公募締め切り

平成6年1月21日(金) 必着

8 (1) 書類提出先

〒657 神戸市灘区六甲台町1-1  
神戸大学・理学部・地球惑星科学科  
学科長 松田卓也 宛て

(2) 問い合わせ先

同科 向井正

Tel.078-881-1212(内線4475)

Fax.078-882-1549

9 応募上の注意

書類は「太陽系助手応募書類」と朱書き、簡易書留で郵送して下さい。

# SGEPSS Calender

1993年

- 11月15日～16日 第15回太陽系科学シンポジウム  
宇宙科学研究所
- 11月17日 宇宙空間原子分子過程研究会  
宇宙科学研究所
- 11月24日～26日 第4回大気化学シンポジウム  
愛知厚生年金会館
- 11月25日 S T E 研究会  
通信総合研究所
- 12月6日～10日 AGU Fall Meeting
- 12月14日～15日 第17回極域における電離圏・磁気圏総合観測シンポジウム  
国立極地研究所

1994年

- 1月10日～11日 Comet Shoemaker-Levy 9 Planning Workshop  
メリーランド大学
- 1月19日 運営委員会
- 1月20日～21日 S T E 研究連絡会
- 1月23日 合同大会プログラム委員会
- 2月2日～4日 京都大学防災研究所・研究発表講演会  
京都大学宇治キャンパス防災研究所
- 2月7日～8日 C A (Conductivity Anomaly) 研究会  
東京大学・地震研究所
- 3月20日～23日 1994地球惑星科学関連学会合同大会
- 5月20日～22日 AGU Convocation of Presidents
- 5月23日～27日 AGU Spring Meeting
- 6月5日～10日 第8回太陽地球系物理学(STP)国際会議  
仙台 国際センター
- 7月25日～29日 West Pacific Geophysical Meeting  
香港
- 8月8日～12日 The 4th SEDI (Study of the Earth's Deep Interior) symposium  
Whistler Mountain, Canada.

SGEPSS 会報にSGEPSSカレンダーとして関係する国内外の学会、研究会、委員会、締切等を掲載する欄をもうけました。むこう6カ月程度の予定を掲載していく予定です。掲載すべき事項がございましたら会報担当の渋谷までお知らせください。

地球電磁気・地球惑星圏学会

会長 大家 寛 総務 森岡 昭

〒980 仙台市青葉区荒巻字青葉 東北大学理学部宇宙地球物理学教室 022-222-1800 ex.3347 Fax 262-6332  
庶務 渋谷秀敏(会報担当)・浜野洋三

〒593 堺市学園町1-1 大阪府立大学総合科学部地学教室

0722-52-1161 ex 3735 Fax 55-2981 e-mail shibuya@cias.osakafu-u.ac.jp

運営委員会 〒113東京都文京区本駒込5丁目16番9号学会センターC21(財)日本学会事務センター 気付

03-5814-5810 会員業務(入退会、住所変更等、会費、会誌)

03-5814-5801 学会業務(庶務、窓口、渉外)

03-5814-5820 ファクシミリ

入会申し込み、国際學術交流事業への応募は運営委員会宛、田中館賞推薦は会長宛、研究助成金案内は総務宛、会報への投稿は担当庶務宛ご連絡ください。会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿をお待ちしています。